視角

子どもの「やりたい！」とは？

溝口義朗

どどめ色

六月。散歩に出掛けた子どもたちは、畑の道を歩きます。畑を貫く道は、所々、大きな桑の木があります。東京の西のはずれは、かつて、絹糸の産地でした。蚕は、桑の葉を食べて繭を作ります。桑の木は、人々の生活を支える大切な作物です。いつしか桑の葉は摘まれなくなり、養蚕の終わりとともに、桑の木はその役目を終えました。

子どもたちの目当ては、古い大きな桑の木に実る桑の実です。たくさん摘んで、かごやバケツで園に持ち帰ります。枝に付いている実は、ジャムを作ります。地面に落ちた実は、布を染める材料にします。ジャムは秋の終わりごろまでの昼食に、染めた布は、ポプリ袋やタペストリー、三つ編みに編んでひもになったり、さまざまに生まれ変わります。

桑の実は摘みながら、もちろん口にも頬張ります。幾つも幾つも食べているうちに、指も口の周りも、桑の実色に染まります。赤い紫色は、どどめ色です。

男の子たちは、木に登り、実を落とします。小さな子たちは、落ちた実を集めます。大きな女の子たちは、枝から摘んだ実をかごいっぱいに集めています。次第に、自然と役割が分担されていきます。

雨の日。傘を差し、レインコートを着て、畑道に出掛けます。散歩するいつもの道は、違う表情になります。雨はバラバラと音を立て、草を濡らし土を濡らします。土は強く香り、どくだみの花はより白く見えます。もやで遮られる視界は、私たちが視覚に頼っていることを拒否させ、嗅覚や聴覚を敏感にさせます。研ぎ澄まされた感覚に、親しんだいつもの道は、踏み込むことを躊躇するほど、何だか怖い道に変わります。子どもも大人も同じように、臆病で慎重になります。遠くキジが「ケーン、ケン」と

鳴いています。

雨の中、桑の木はいつもより大きく見えます。葉の重なり合う部分は、真っ暗で何か潜んでいそうです。枝は時折、ザワザワと風に揺れます。桑の実を摘み取る気にはなれません。子どもたちも、大人たちも、静かに桑の木を見上げています。

東京都認証保育所の35人の子どもたち。小さな子も、大きな子も、私たち保育者も、一つの家族のようになって毎日を過ごします。毎日の出来事は生活に根付き、その過ごす毎日の中に、遊びも、教育も、養護も、家庭支援も、ごちゃごちゃになって繰り返されていきます。

学校は教育できない？

保育は、『養護』と『教育』を一体的に行うとされています。養護は、命を守り、その子そのままの育ちを保障していくことだと思います。では教育とは何なのでしょうか。私は保育者なので、教育の専門的なことはわかりません。ただ、おそらく、人間が生まれ人として育っていくために、教育はあったはずです。人として育ち、そしてまた新たな生命を生む。そうしなければ、次の世代に子孫を残し、人の営みを連綿と続けていくことはできなかったはずです。人間が生まれ、人として育つ場所は家庭であり、家庭が成り立つための機能が『社会』であったはずです。家庭は社会と共にあり、社会は家庭と共にあった。となると、家庭と社会は、密接に関係し合い、人を育てていったはずです。家庭が人を育て、社会が人を育てた。

学校は、特殊な装置であると思います。少なくとも、このような集団はあり得ない。同年齢の集団が、30人なのか40人なのか決められた人数で組織され、同一の行動に対し、同一の評価を求められる。同じ時刻に同じことをし、同じ食事を同じ量食べ、同じように歌い、同じように遊ぶ。だから子どもたちは、最後には、覇気のない同じような薄ら笑いを浮かべるようになるのではないでしょうか。言い過ぎかも知れません。すみません。とにかく、そんな集団は、

自然な社会では奇妙だと思うのです。

学校という装置が発明され発展したことも、時代の社会が作り出した教育そのものといわれるかもしれません。そのとおりだと思います。だからこそ、今の時代の背景を反映した教育の方法に進むべきではないかと思うのです。

学校の特殊性に気付くと私たちが何をすべきなのかが見えてきます。「昔は良かった」と、ノスタルジックに過去を思い出すこととは違います。人が育つための、本来の社会の姿に少しずつ変革していけばよいのだと思います。

本当は、アトムの住む科学の街も、人生ゲームの億万長者のような経済の街も、人は望んでないはずです。私たちは、人が人らしく毎日を生き、次の世代に繋げていける、そんな平凡な日常こそが『生活』であり、幸せであることを知っているはずです。

そうなると保育所は

保育所の環境は、社会の中にある「あたりまえ」の環境なのでしょうか。やはり、特殊であるように思います。生まれて数年のうちに、誕生した年度で集団化され、同じ給食を食べ、色帽子をかぶり、うさぎやパンダに飾られたかわいい壁面に囲まれて、お遊戯をちいちいぱっぱとしています。

できないことや苦手なことを克服することに美意識をもった多様性の無い大人たちに囲まれて日々過ごしている。やはり、言い過ぎかもしれません。しかし、そう間違ってはいないような気がします。保育者自身も、その環境にうんざりとし、疲れているはずです。理由は簡単です。人が人として育つ、すなわち、人としていられる、自分らしくいられる環境ではないからではないでしょうか。

保護者や子どもに対し、『保育』や『幼児教育』という名の優位性を保つために、保育所を特殊な形に発展させてきたのだと思います。生活そのものを教育とすることは、家庭との違いを説明できず、そこに価値が見いだせない状況を恐れ、より特殊な仕組みとしてきたために、社会には無い特殊装置が完成

したのだと思います。

保育所は、保育所内に社会を作るべきです。何のことはありません。保育や教育に対する私たちのもつあいまいな概念を、人が人として育つための本来の目的を変えていけばよい。普段生活しているそのままを、保育所に環境構成すればよいのではないでしょうか。特殊なものがあたりまえになることは、恐ろしいことだと思いながら。

子どものやりたいこと

自主性は言い換えれば、「わがまま」であると思います。芸術家の優れた表現も、スポーツ選手の洗練した動きも、私たち保育者の保育への情熱も、これらはすべて自己の欲求、言い換えれば「わがまま」であると思います。

保育所の子どもたちのもつ「わがまま」は、家庭を離れ保育所という社会に対面すると、その表現方法を変化させます。この日々、目の前の環境に対して行う行為（行動）の積み重ねが学習であり、目の前の環境が教育の装置であると思います。社会で人が育つためには、自主性が社会という環境に出合い、社会性に変換されていく過程が重要であると思います。それが保育所の役割ではないでしょうか。

六月。桑の実を摘んだ子どもたちの姿は、大人の指示したものではありません。自らが、生活という環境の中でとった行動であり、毎日、毎年が同じように過ぎていくことの繰り返しの中で、自らが学習してきた行為です。人が育つ場所を考えた時に「あたりまえの環境」、いうなれば、どこにでも転がっているような環境こそが、最も重要ではないでしょうか。その中では、見えないものが見え、聞こえないものが聞こえ、本当に自然の流れの中で生きることの喜びを感じられるのだと思います。日々花鳥風月を愛でる、本当の教育はそんなことでよいのではないかと思うのです。

（東京都認証保育所ウッディキッズ）